東医大誌　**75**(2)：267-268, 2017

学会参加記

第 20 回国際パーキンソン病運動障害疾患学会に参加して
20th International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders（MDS）

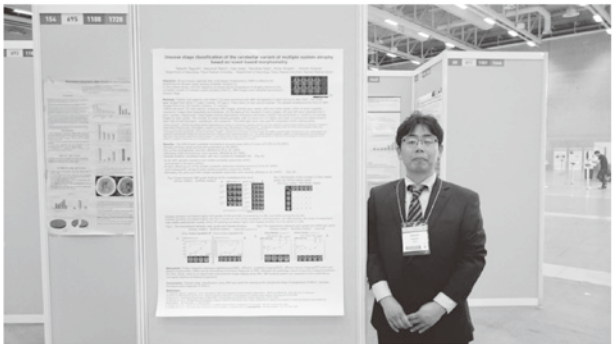
田　口　丈　士
Takeshi TAGUCHI
東京医科大学神経内科学分野

2016 年 6 月 19 日から 23 日までドイツの首都ベルリンにて開催された第 20 回 MDS（International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders：国際パーキンソン病・運動障害疾患学会）に当教室の赫寛雄准教授とともに参加及び発表の機会を得られましたためご報告いたします。我々が参加した前年は、2011 年より内戦状態となったシリア騒乱に端を発した、欧州連合（EU）域内のシリア難民受け入れ問題が顕在化した年でした。演題登録の作業をしていた時期にパリ同時多発テロ事件が起こるなど、情勢不安がよぎりましたが、無事帰国して本稿を書いております。

神経学会においては、"Movement Disorders：パーキンソン病・運動障害疾患" は脳卒中とともに多くの演題のある領域です。パーキンソン病は、アルツハイマー病についで頻度の高い変性疾患ですが、いまだ根本的治療がなく、社会的関心も極めて高い疾患です。また錐体外路系疾患は研究の進展が早い領域であり、小脳系疾患は日本勢による新たな発見もあった領域です。

2016 年 6 月 18 日に 10 時台の便で羽田国際空港を発ち、シャルル・ド・ゴール国際空港を経て、22 時にベルリン国際空港（テーゲル空港）を降り立ちました。宿泊ホテルは、旧西ベルリンにおける中央駅の役割を果たしていた動物公園駅のそばに位置し、駅の向こうには旧西ベルリン時代における商業の中心地であったクーダム地区があります。学会会場は、ベルリン市内を走る東西高架線（S バーン）で動物公園駅より郊外へ数駅離れたベルリン・シティキューブでした。ここは広大な敷地のなかに建てられた新しいメッセで、5,000 人の収容が可能な大ホールと、数十の小ホール・会議室があります。

当学会の特徴は、講演の多くが up to date な話題ではなく教育講演が主体であるということです。朝から昼まで、そして午後からイブニングセミナーま



で多くのテーマ用意されていました。日本神経学会では私の専門領域である小脳変性症の講演は多くはありませんが、本学会では小脳変性症に関連した講演を多数聴くことができました。また講演会のハンドアウトも用意されており、とても貴重な勉強の機会となりました。本邦で多くみられる遺伝性脊髄小脳変性症のマシャド・ジョセフ病（SCA3/MJD）は海外においては稀であることや、岡山大学が発見に貢献した脊髄小脳変性症 36 型（SCA36）に関する講演（岡山大学のおの字も出てきませんでしたが）も勉強になりました。自己免疫性小脳失調症においては八王子医療センター神経内科南里和紀教授と本校医学教育推進センター三苫博教授がこの分野の第一人者であることを、講演およびハンドアウトを通してあらためて確認しました。

会場内にレストランがないため、ベルリン中心街で昼食を摂りました。ベルリン中央駅を降り国会議事堂を通ると、ベルリンの壁崩壊の舞台の象徴的スポットとなったブランデンブルク門が見えます。そこを抜けると旧東ベルリン地区へとなります。看板やイルミネーションは旧西地区に比べると少なく、無機質な集合住宅が建ち並び、旧西地区ではみられない路面電車もいまだ現役でした。東西ドイツ統一より四半世紀が経ちますが、壁は無くなっても東西の差は感じられました。市内を縦横無尽に走る東西高架線（S バーン）は、旧西側も東側も朝の通勤時間や日中も含めてガラガラで、自転車を持ち込む人さえいます。またスーツを着たビジネスマンを見かけることは少なく、18 時以降の労働が禁じられている、という経済大国ドイツの首都のとは異なるイメージがありました。ベルリンより南西部の郊外に位置するポツダムでは、プロイセン王・フリードリヒ 2 世の夏の離宮 “サンスーシー宮殿（代表的なロココ建築）” を訪れました。壮大な庭園のなかにコンパクトな宮殿が建つというのは、ドイツの工業品にみられるドイツらしい機能美を連想しました。

日本からの参加者のほとんどがネクタイ・スーツ姿であることから見分けがつきやすいということもありますが、赫先生曰くアジア系の参加者が増えているとのことでした。特に中国系参加者の演題は近年増えており、学問の進化を歓迎するべきところではありますが、我が国よりの発信を今まで以上に増やしていく必要性を感じました。

最後に、本学会発表の機会を与えてくださった相澤仁志主任教授をはじめとした当教室の先生方、東京医科大学八王子医療センター南里和紀教授、関係者の方々にはこの場をお借りして御礼申し上げます。